

児童の思考に沿った授業設計 ～単元計画を基盤にして～

高度学校教育実践専攻教職実践高度化系

教員養成特別コース

氏 名 村上 夢歩

キーワード：単元計画 既習事項 発問 言葉かけ

実習責任教員 葛上 秀文

実習指導教員 江川 克弘

1. 課題設定の理由

筆者は、ゼミでの時間や「教職協働実践演習」の授業における現職の先生方との実践授業の検討から、児童の思考に沿った授業設計ができていないことを痛感した。また、本単元や本時の目標は何か、児童に何を身につけてほしいのか、なぜこの活動内容を設定したのか、といった検討をする中で、明確な学習目標や意図をもって活動を設定することができていないことがわかった。これまで筆者は、実践する授業時間のみに視点を置き授業を設計することが多く、教材研究も不十分であったことが考えられる。単元全体はもちろん本時のねらいでさえも曖昧な状態で授業を実践してしまい、児童が何を学んだのか、筆者自身が何を学ばせたかったのか分からない授業となっていた。そこで、本時のねらいや児童に学ばせたいことを明確にするためには、単元計画を踏まえた授業設計が大切だと考えた。明確な単元又は本時のねらいのもと、児童の柔軟な思考を働かせ、発言を引き出し、児童とともに授業をつくっていききたい。そのために、実践する授業時間のみに視点を置いた授業設計ではなく、単元全体の授業設計が必要だと考えた。それに加え、児童の思考に沿った授業を設計することもまた課題であると考え、本研究課題を設定した。

2. 基礎インターンシップにおける授業実践とその課題

基礎インターンシップでは、第6学年の算数科「比例と反比例（12/17時間）」の授業を行った。本授業は、比例の学習と対比しながら、表を横に見て反比例の定義、縦に見て反比例の性質を導き出すことをねらいとしている。導入では、比例する問題文と表（以下、表㊸）を示し、これが比例していると言える根拠（変わり方のきまり）を復習した。展開では、反比例する問題文と表（以下、表㊹）を示し、まずは個人で表から変わり方のきまりを見つけ、班で共有し、ホワイトボードを用いて全体に共有するという流れで行った。

本授業において挙げられた課題は、①めあてに焦点をあてることができていなかったこと、②単元のつながりを意識した既習事項の振り返りができていなかったこと、③児童の思考に沿った授業の流れを設計できていなかったことの3点が挙げられた。課題①の要因としては、本時のめあてを「表を横や縦に見て、変わり方のきまりを見つけよう。」と設定していたにも関わらず、授業後の板書を見ると、「変わり方のきまりを見つけることはできているが、「表を横や縦に見る」ということへの意識が薄かったことが挙げられた。課題②の要因としては、既習事項である比例を参考に、反比例について学習する

必要があったが、筆者自身が比例を参考にすることを強く意識できておらず、既習事項と新しい学習内容を結びつけた学習計画ができていなかったことが挙げられた。課題③の要因としては、唐突にめあてや本時の問いを提示し、教師が一方的に流れを作ってしまうことが挙げられた。このように、筆者は本時の目標や学習内容、流れを児童はもちろん筆者自身もおさえられていない状態で授業を行っていたことがわかった。

3. 総合インターンシップ（前半）における授業実践とその成果と課題

総合インターンシップ（前半）では、基礎インターンシップにおける授業実践の課題から、まずは単元のつながりを考え、ねらいをより明確にするため、単元計画を踏まえた学習指導案を作成する必要があると考えた。また、教科書をしっかり読み取り、既習事項をもとに新しいことが学習できる流れを考えることにより、児童の視点に立ち、思考の流れを整理することができるのではないかと考えた。総合インターンシップ（前半）では、第3学年の算数科「たし算とひき算の筆算（1/8時間）」の授業を実践した。単元計画を踏まえ、本単元ではこれまで学習した筆算との違いは何かを児童が気づき、学習を進めていくことが大切だと考えた。本時のねらいは、「既習事項と結びつけ『3桁の筆算も2桁のときと同じように計算することができないか』という考えを児童自ら見だし、3桁の仕方を習得すること」である。既習事項である2桁の筆算「 $38+56$ 」について復習した後、「 $154+237$ 」の3桁の筆算との違いに気づき、2桁の筆算をもとに3桁の筆算の仕方について考え、全体で共有し、まとめ、適応問題に取り組むと

いう流れで行った。

（1）成果

まとめの後の適応問題において、ほとんどの児童が全問正解しており、本時のねらいである「3桁の筆算の仕方の習得」はできたことが成果と考える。このことから、本授業において基礎インターンシップにおける課題であった単元計画を踏まえて、ねらいを明確にするということは達成できたと考える。また、児童の実態から授業を計画しようとすることができたことも今回の成果と考える。筆者は、本学級の児童の実態として、文章問題を立式することに困り感を感じていると捉えたため、立式するまでの手立てを丁寧に行った。まず全員で問題文を読み、「分かっていること」「求めること」に印や下線を引くなど行い、自分で問題文の中から必要な情報を見つけて立式できるよう意識した。

（2）課題

本授業においても、児童の視点に立ち、思考の流れを整理するという課題についての改善は不十分であったことが挙げられた。共有場面における児童の姿やワークシートから、児童は3桁の筆算の答えを導き出せてはいたが、3桁の筆算の仕方について考えること、ワークシートに考えを書き残すことはできていなかったと感じた。これらを踏まえ、具体的な課題としては、①既習事項の確認の仕方について、②考え方の共有方法について、③時間配分についての3点が挙げられた。課題①は、言葉のみによる確認や計算の答えのみを問う発問ばかりをしたことにより、3桁の筆算の解き方は確認したが、筆算の仕方（アルゴリズム）については確認できていなかったことを踏まえ、課題として挙げられた。筆者が既習事項として何を確認する必要があるのか、詳細に捉えることができていなか

ったことが要因と考える。課題②は、教師対児童のやりとりをしていることが挙げられた。児童を自分の席から言葉のみで説明するよう促すなど、共有方法や共有の仕方に工夫が足りなかったことが要因だと考えられる。課題③は、3桁の筆算の仕方を考えるという本時の重要な部分となる時間を十分に確保できなかったことから課題として挙げられた。この要因としては、児童の実態として文章問題が苦手な児童が多いと感じたことから、立式するまでの手立てを丁寧に行い過ぎたためだと考えられる。これは、上記でも述べているように成果としつつ課題としても改善すべき内容として挙げられた。

4. 総合インターンシップ（後半）における授業実践とその成果と課題

総合インターンシップ（後半）では、これまでの授業実践における課題を踏まえ、①児童の視点に立って、思考の流れを整理すること、②発問・言葉かけを工夫することの2点の課題に重点を置き、授業を設計し実践した。実践した授業は、第3学年の体育科「とび箱運動」の7時間中5、6時間目である。本単元で取り扱ったとび箱運動における技は、開脚跳び、かかえ込み跳び、台上前転である。筆者はそのうちの台上前転における授業を2時間実践した。本授業は、マットを三つ折りにし、とび箱と同じ幅の線を引いたり重ねたりした場やとび箱の上にマットを敷いた場など様々な場で前転することにより、台上前転を行う感覚を掴むことがねらいである。児童は、本時で初めて台上前転に挑戦するため、まずは台上前転に対する恐怖心が少しでも和らぎ、挑戦してみたいと思うことができる場作りや言葉かけができるよう意識した。第6時では、第5時の活動状況を受け、目標を

「自己の課題を見つけ、いろいろな場で前転に取り組むことができる。」と設定し、前時より自己の課題を意識した学習ができるよう意識した。第5時における児童の振り返りや台上前転を行う際のポイントを提示し、その中から自己のめあてを選択する。その際には、板書に名前磁石を貼ることにより、めあてを視覚化できるようにした。

（1）成果

本授業における成果は、どの児童も主体的にとび箱を跳ぼうとする姿が見られたことである。本授業を行うにあたって、4年生の学習へとつながるよう、技の完成以上に児童のとび箱運動に対する主体性を大切にしたいと考えていた。そのため、思い切って台上前転に取り組むことができ、段階的に自分に合った場を挑戦することができるような場づくりを意識した。このように、「怖い」「できない」などとび箱運動にマイナスイメージを持つ児童の視点に立った場の設定はできていたのではないかと考える。

（2）課題

本授業における課題として、①めあて（課題）を意識できる授業展開をつくること、②時間配分（活動量の調整）、③児童同士が対話する時間をつくることの3点が挙げられた。課題①は、第5時の児童はとても主体的であったが、ただ跳び続けるだけになっており、学びが少なかつたのではないかと考えられたこと、第6時では、めあて（課題）に対する意識が低い児童が多いように見られたことから課題として挙げられた。その要因としては、学びの種を与えられていなかったこと、具体的な言葉かけができていなかったことが考えられた。課題②は、第5時においては「お茶が飲みたい。」と児童から声上がるなど活動量が多すぎたこと、第6時では、第

活動の場の準備を授業時間内に児童と一緒に取り組んだことによる活動時間の短縮や前時の十分すぎるほどの活動量との比較から、児童が物足りなさを感じていたことから課題として挙げられた。ここでは、活動中に全体でポイントを確認する時間を作る、跳ぶテンポを調整する活動ルールを追加するなど、活動量を調整する工夫が必要だったと考える。また、第6時のように児童が物足りなさを感じないようにするためにも、体を動かしながらも考える（頭を使う）時間をつくることが必要だったと考える。課題③は、第5時において全体を集めて問いかけたり、第6時では友達の技を見て評価し合うという共有時間を作ったりしたが、児童同士が対話し、学びを深める時間をつくることはできていなかったことから課題として挙げられた。その要因としては、第5時において唐突に抽象的な発問をしたことにより、児童が考え合う時間をつくれなかったこと、また、第6時の共有場面において、まず教師が評価してしまったことだと考えられた。

5. 今後の取り組みについて

筆者は、基礎インターンシップの課題から、総合インターンシップにおいて単元計画をもとに児童の思考に沿った授業設計を目指したが、まだまだ筆者が目指す授業設計はできていないと感じる。以前と比べ、前後の学習とのつながりを考えて授業を作る意識は強くなったと感じるが、具体的な計画はまだ立て切れていないと感じる。そのため、単元終了時の理想となる児童の姿を考え、その姿に近づくための手立てを十分に練っておくことが必要だと考える。また、教科書を読み取り、児童の思考に沿うよう授業を設計し実践したつもりでいたが、結局は教師

が引いたルールに児童を乗せようと誘導しすぎていたと感じる。そのため、押さえるべきポイントを把握し、「こうしよう！」ではなく「こんな風にしたら？」と学びの種を与えながら、児童と一緒に授業を作り上げる意識を持つようにしたい。単元計画をもとに「児童が気づき、考え、学び合う」授業を設計できるよう、①適切な実態把握を行うこと、②主要な問いや言葉かけを大切にすること、③学びの種を与えること、④考え方や学び方を学習できるようにすることの4点について、今後は特に意識していきたい。取り組み①では、筆者自身が目で見て感じた児童の姿だけではなく、児童に聞き取り調査を行うなど性格や気持ちを踏まえるよう意識する。そして、どのように学習をしていきたいか、児童と一緒に考えることができるようにしたい。取り組み②では、児童が課題をとらえやすい問いや具体的な言葉かけを意識し、児童が問いを自分ごととしてとらえられるよう、導入段階から問いを意識して授業を行う。また、問い返しを意識し、児童同士が対話し、考えを深め合うことができるようにすることも忘れないようにしたい。取り組み③においては、児童がレベルアップしていくためにも、教師が伝えることと児童が考えることを整理し、本時で学ばせたいポイントを確実に児童に掴ませることができるようにしたい。教師が全て説明するのではなく、児童が気づく手助けを行ったり、気づいたことを整理したりできるように意識する。取り組み④に関しては、学習内容だけではなく、学習することによって考え方や学び方を学ぶこともまた授業において重要なことだと考える。これは、1回の授業で身につくことではないと考えるため、長い目で見て働きかけ、考え方や学び方を大切にしたい授業設計を行っていきたい。